

特別支援学級における、 子供の「思いをいかす」 環境構成の在り方と授業づくり

《執筆者》梶川 明子

勤務先：山口県岩国市立愛宕小学校 教諭

出身校：山口大学 教育学部 学校教育教員養成課程 美術教育



概要

幼稚園・保育園では、環境を通して行う教育を基に「子供の遊びは学びである」とし、子供は自発的な活動としての遊びの中で思いをつないで表現活動をしている。しかし、小学校では、表現活動において発想や構想の段階でつまづいている子が少なくない。特別支援学級でも、なかなか自分の思いがもてず戸惑っていたり、他の子の真似をして試行錯誤しているうちに時間が過ぎてしまったりする姿が見られた。このような課題から、子供の生活をみとり、「思いをいかす」という視点をもって環境設定や授業づくりに取り組むことで、創造的に発想や構想する力を育て、子供の自己肯定感の向上にもつながるのではないかと考えた。

子供の日々の様子から、感覚や行為と素材や場所をつながりながら感性を働かせている瞬間は、図画工作科の時間だけではなく、もっと日常にあふれている、と感じた。本研究では、子供を取り巻く環境を見直し、子供同士の関わりや見つけた思いを交流する「見てみてコーナー」や、身の回りの素材を

操作して楽しめる「ひらめきコーナー」をつくることで、日常的に造形的な楽しさに触れられる場とした。コーナーの設置によって、子供が諸感覚を働かせて「もの」と関わり、発想を広げると共に、自発的にコミュニケーションを図る場ともなった。

子供の思いを読み取る方途として、生活場面の中での子供の興味・関心等を切り取った写真ドキュメンテーションを作成・掲示し、環境構成を行った。また、実践の導入で絵本の読み聞かせを行い、音のリズムやオノマトペと絵のつながりから生まれる絵本の魅力を通して子供の思いを引き出し、表現意欲を高めるようにした。表したいものを思い出すことが難しかった子供が、イメージを広げ、夢中になって創作活動に励んでいた。

今後の課題として、日常生活の中にあふれる「もの」や「こと」、「人との関わり」について、子供たちの感性を刺激し、子供の主体的な造形活動を探求していきたい。

目次

1. 研究テーマ設定の背景と理由
2. 研究内容
 - (1) 思いをいかす環境構成
 - (2) ドキュメンテーションを用いたみとり
 - (3) 実践
 - ① 「トントン カンカン うまれたよ」
 - ② 「ねんど どろん、だいへんしん！」
 - ③ 「ぼくの わたしの 『はいくないきもの』 たんじょう！」
3. 研究の成果と課題

1. 研究テーマ設定の背景と理由

本校には、知的障害学級、自閉症・情緒障害学級、肢体不自由学級があり、支援学級全体で21名の児童が在籍している。筆者は自閉症・情緒障害学級7名の担任をしている。本校では、障害種別で学習や活動を仕組むのではなく、知的発達の段階や身体能力等に合わせて様々なグループを編成し、支援学級の担任全員が学級の枠を超えて支援する体制をとっている。在籍する子供の全員が図画工作科を交流学級で学習しており、工作に表す活動を好む児童が多い。しかし、どの活動においても発想や構想の段階で困り感を抱える子供が多く、T2（補助的な授業者）として支援に入ると「先生、何を描いたらいいん…」と援助要求してくる姿がよく見られる。これまでの筆者の関わりを振り返ると、子供が「できない」「やりたくない」というマイナスの感情を抱いてからの支援になってしまっていたことが課題である。一方で、図画工作科の時間に発想や構想がうまくいかずに戸惑い固まっていた子供が、生活の中では「先生、見てみて！きれいでしょ」と拾った石や紙の切れ端に描いた絵をうれしそうに見せに来ている。

このことから、図画工作科の時間だけでなく、日々の生活の中で自ら発見した形や色に愛着をもち、イメージを広げる

環境を設定することで、創作活動での意欲や発想の広がり、更には表現することで自己肯定感の向上にもつながるのではないかと考えた。(図1)

これまでに支援学級において行っている自立活動は、子供たち一人一人の教育的ニーズに合わせた巧緻性に関わる技能や、コミュニケーション力の向上を目指したものが主である。加えて、支援学級の小集団における教師のみとりと場の設定により、児童の思いを引き出し、授業づくりへとつなげることによる効果を本研究において検証したい。

2. 研究内容

(1) 思いをいかす環境構成

子供が登校してすぐに「先生、見て！」と自分でつくった折り紙や絵、道端に落ちていた石などを見せてくれることがよくある。中には、「ぼくが昨日の夜ご飯に食べた鯛の歯！おもしろい形でしょ！」と、家から魚の歯を持ってきてうれしそうに見せてくれた子もいる。そうしているうちに、他の子が集まってきて「なになに、見せて！」と盛り上がる。こうした生活の中での子供同士の関わりの中に、図画工作科につながる「色」や「形」について、子供なりに「おもしろい」「素敵」と感じ取っていることがわかる。このような実態から、

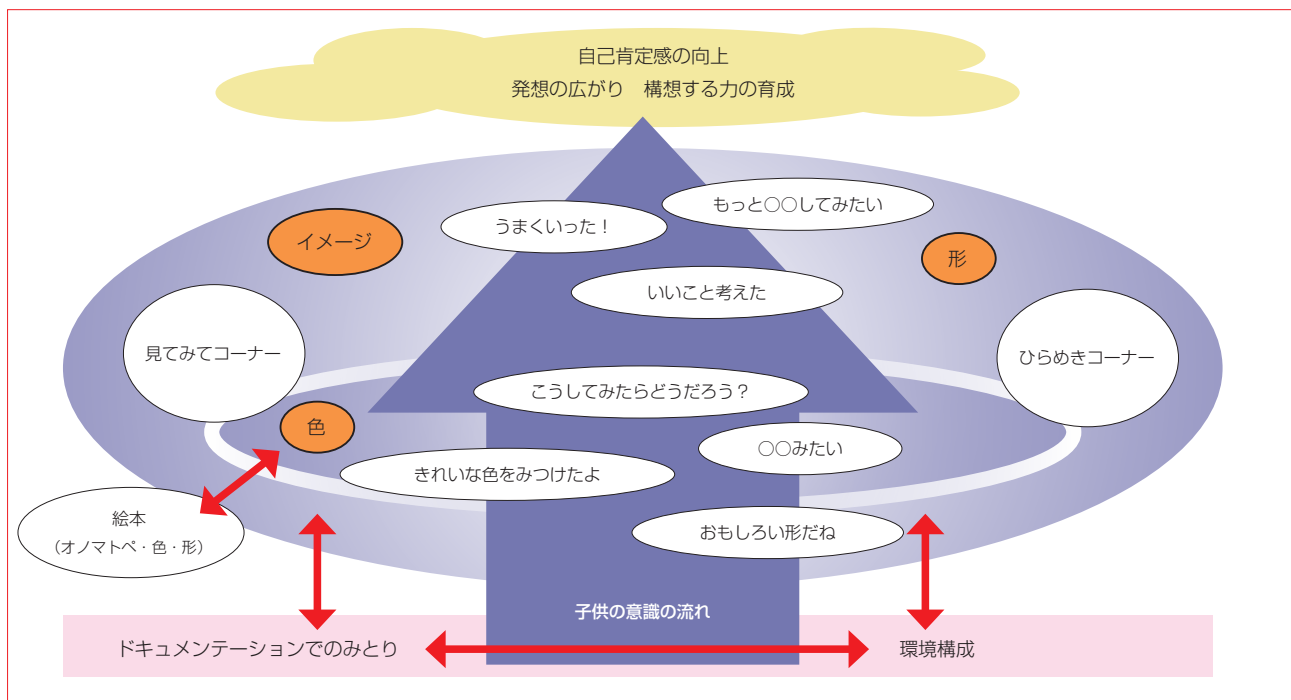


図1 環境構成における効果と子供の意識の流れ

場の構成として教室に「見てみてコーナー」を常設し、子供が見つけた自然物や作品を掲示した。(写真①)

子供は、友達作品を見て会話をし、日頃はコミュニケーションが課題であるA児が楽しそうに自分の作品について話していた。さらに、驚いたことに、いつもは自分のつくった物を人に見せることを好まないA児が自分から展示をし、毎日よりよく見える角度を探して飾っていた。

日常的に諸感覚を働かせながら色々な材料に触れてほしいと思い、子供が生活の中で見つけた素材を置いた「ひらめきコーナー」を不定期で設けた(写真②)。子供は、綿や木材などを触ったり、においを嗅いだりして思い思いに感じたことを友達に伝えていた(写真③)。A児が拾ってきた石を数個置いておくと、B児が石同士を打ち合わせて「つるつるの石、いい音がする!」と触感や音を感じ取っていた(写真④)。そこへA児が来て、「こっちの石の方がもっと高い音がするよ」と紹介してみせていた。

小学校学習指導要領解説(平成29年告示)では、「障害のある児童などへの指導」について「自分のイメージをもつこ

とが難しい場合は、(中略)自分のイメージをもつことのきっかけを得られるように、自分や友人の感じたことや考えたことを言葉にする場を設定するなどの配慮をする」と明示された¹。さらに、特別支援学校学習指導要領解説でも「自分の見方や感じ方を広げること」について示されている²。授業の中だけでなく、日常的に教室の中でこうした場があることで、コミュニケーションが苦手な子供が、自分の作品を飾ってほしい、友達に紹介したいという思いがわき、自発的にコミュニケーションを図る場ともなった。また、身の回りの素材に触れ、発見したことや感じたことを友達と共有する姿も多く見られた。

(2) ドキュメンテーションを用いたみとり

子供たちは、日常の中にある様々なことに興味や関心をもっていることを改めて実感している。色鉛筆の削りかすを見て「うわあ、きれいだね。虹みたい」とつぶやくなど、身の回りの何気ないことに対して心が動かされている姿をよく見かける。子供の感性により、興味・関心をもつ視点はおも



写真① 見てみてコーナー



写真② ひらめきコーナー



写真③ 諸感覚を働かせて材料と関わる様子



写真④ 石を打ち合わせるB児

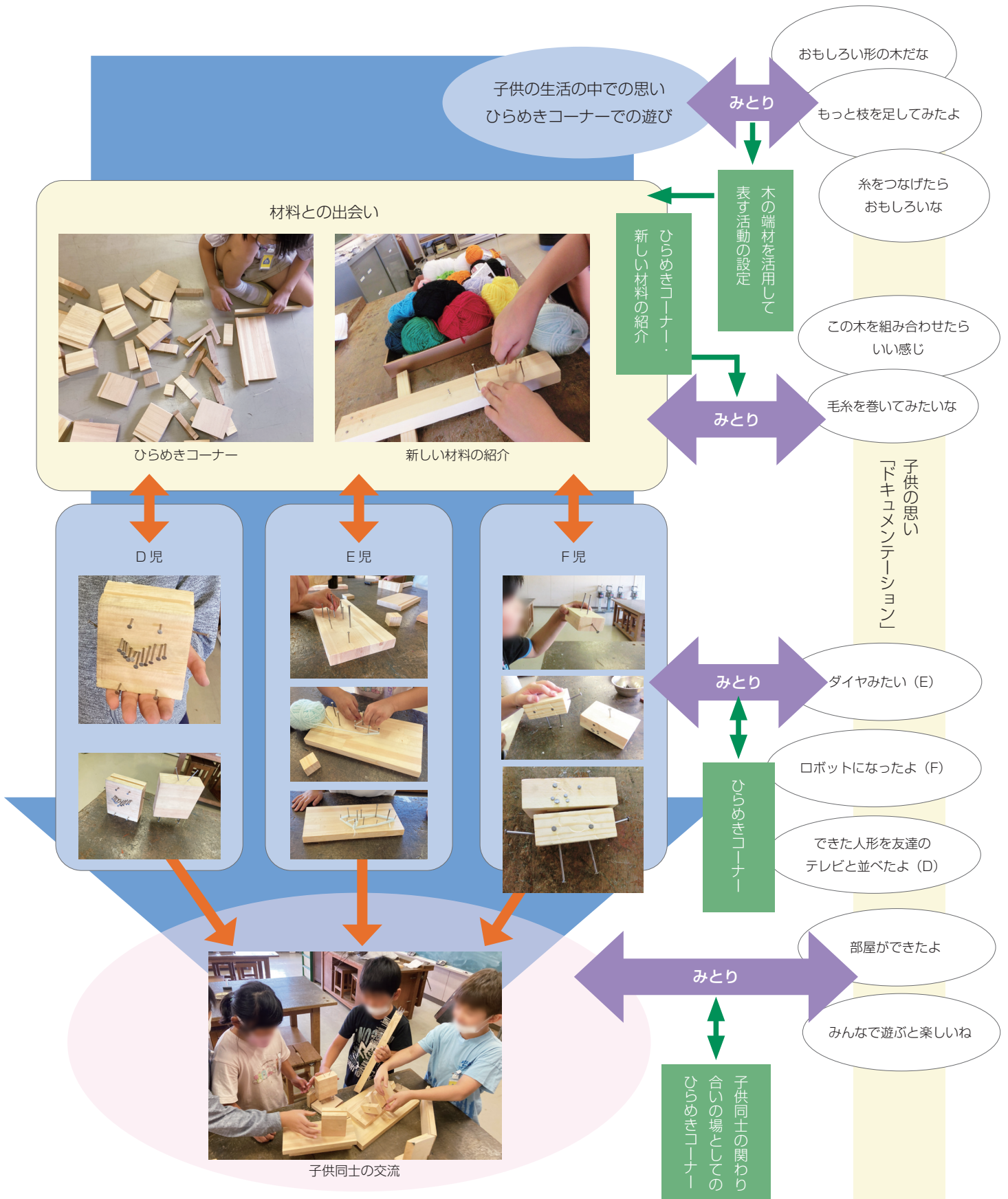


図2 「トントン カンカン うまれたよ」活動の流れ

笑っている人形をつくった。できあがった人形と友達がつくったテレビを使って友達と一緒に楽しそうにごっこ遊びをした(写真⑦)後、日頃は口数の少ないD児が、

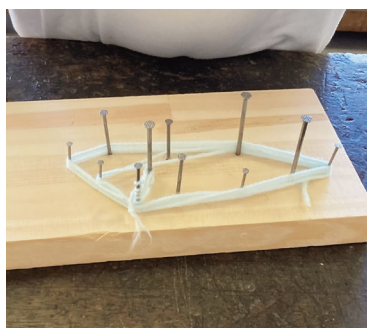


写真⑦

「うまくできた！ 妹にあげようかな」と満足そうにしていた。後日、「先生、妹が喜んでたよ。またやりたいな」と言っており、D児の満足感につながった様子がうかがえた。

(イ) E児の場合

E児は手先があまり器用ではなく、自分の表したい物を形にするのに時間がかかる傾向があるが、授業が始まってすぐに「ひらめきコーナー」で大きめの板を手にとった。釘の長さを自分なりに選んだ後、釘の高さを確認しながら次々に板に打ち付けていた。釘を打つ行為そのものを楽しんでいるようだった。打ち終わると、釘の周りに毛糸を巻き付けていた。時間をかけ、たるまないようにピンと張っていき、「ダイヤモンドになった！」と喜んでいた(写真⑧)。周りの子が「Eちゃん、すごいね。きれい」と声をかけ、「いいでしょ」と笑顔で答える姿が見られた。釘を打った物に毛糸を巻くことから偶然生まれた形を見て、E児の中で発想が広がったようだった。



写真⑧

(ウ) F児の場合

ひらめきコーナーで手のひらサイズの木材を1つ選ぶと、2本の釘を打ち付けながら高さを何度も確認していた。「ロボットの足にしよう」とつぶやき、手と顔を釘で打って表現した。さらに、ひらめきコーナーから木材を1つ選び、釘で



写真⑨

顔をつくった。「2つロボットができたよ」と喜び、組み合わせて遊んでいるうちに「見てみて！ 合体させたら大きいロボットになる！」と友達や教師に紹介していた(写真⑨)。日頃は表し方を工夫することが難しく、見本や周りの子の作品を見て製作をすることがあるF児だが、材料と関わりながら主体的に取り組む姿が見られた。

②「ねんど どろん、だいへんしん！」

休み時間に、G児が校庭の地面に絵を描いて遊んでいた。雨上がりだったこともあり、乾燥した部分と湿った部分を木の棒で混ぜ合わせて楽しそうに遊んでいた。そのうち、友達が加わり、線路ができたのちに電車を走らせて会話が弾んだ。このような姿から、粘土を使った造形遊びを設定した。(次ページ・図3)

授業の導入で『ねんどろん』(荒井良二、講談社)と『つちどすん』(新井洋行、童心社)を読み聞かせた。子供たちはリズムのよい言葉と次々と形が変わっていく粘土たちを大変気に入っていた。

教室の床一面に青いビニールシートを敷き、一人ずつ10キロ程度の土粘土の塊を渡した。足で踏んだり、手で捏ねたりしていくうちに、友達の粘土と合体して大きな塊になる子、海の中の生き物をつくって楽しそうに泳がせている子が出てきた。時折、相互に関わり合いながら同じ空間を楽しんでいる姿も見られた。子供たちに特に人気だったのは、粘土の丘である。遊んでいくうちに大きな塊となった粘土に霧吹きで水をかけると、つるつるとした坂道ができ、子供たちは裸足で思い思いに土の感触を楽しんでいた。終盤に鑑賞として設けた「見てみてタイム」では、友達の作品を見たり一緒に遊んだりすることで子供は満足そうに活動していた。

(ア) B児の場合

想像力が豊かで手先が器用なB児は、手が汚れることをあまり好まない一面がある。これまでの工作に表す活動では、のりではなくセロハンテープを使ったがり、手が汚れるとすぐに洗うことがあった。授業のはじめは、おそろおそろ粘土を触り、しばらくしてから粘土を細く伸ばして丸め、「ドーナツができた」と友達に見せていた(写真⑩)。



写真⑩



図3 「ねんど どん、だいへんしん！」活動の流れ

その後、友達が粘土の丘で遊んでいる姿を見て、つるつるした坂道を何度も滑り、「もっと水を足してつるつるにしたいい！」と言っていた。B児が手や足が汚れることが気にならないほど活動に夢中になっている姿を見て、活動する場の広さや提示する材料の量などを十分に設けることにより、子供の感覚を刺激し活動の幅を広げることができると感じた。

(イ) G児の場合

日頃の製作活動ではつくりたい物がなかなか思いつかず、教師の助言を求めたり友達の真似をしたりしたがるG児は、初めは周りの様子を見て何をするか考えているようだった。だん



写真⑩

だん慣れてくると、友達と一緒に捏ねたり踏んだりして体全体で粘土の触感を楽しんでいた。途中から人形やボールをつくり一人で遊んでいたが、近くの友達がつくった滑り台で滑らせて楽しそうに会話をする姿が見られた(写真⑩)。友達と粘土を使った遊びを通して、土粘土の触感を楽しみながらイメージを広げることができたことがうかがえた。

授業後の全体の感想では、「つるつるが気持ちよかった」「もっとやりたい！次はいつやるの？」などの言葉がたくさん聞かれた。絵本を用いた導入により、製作意欲を刺激しながらイメージを広げ、活動に移ることができたと感じる。さらに、諸感覚に働きかける造形遊びは、子供たちの感性に働きかけ、自分から「やってみたい」「もっとやってみよう」という思いを引き出すことに有効だと改めて実感した。

③ 「ぼくの わたしの 『はいくないきもの』たんじょう！」

1学期に交流学級で絵の具を使った製作活動があったB児が、「もっと描きたいな。絵の具をベタッとそのまま塗ってみたいなあ」とつぶやいた。本校の特別支援学級の約7割の児童が絵に表す活動が苦手なこと、発想や構想の能力に課題がある。そこで、画用紙に絵の具で直接絵を描く活動を行った。(次ページ・図4)

導入で、『はいくないきもの』(皆川明・絵、谷川俊太郎・文、クレヨンハウス)を読み聞かせた。俳句の韻のリズムと不思議な言葉、見たことがない生き物がマッチした絵本から、子供たちは「うわー！なんだこれ?」「鹿みたい!」「いや、トナカイじゃない?」などと、感じたことを口々に話し

ていた。その後、「自分たちの『はいくないきもの』を描こう」と投げかけ、製作を開始した。子供は大胆なタッチで筆を進めていった。下書きをせずに直接画用紙に描くことで、のびのびとした筆運びだった。

(ア) B児の場合

B児は、絵本の読み聞かせの後に掲示した挿絵を見ながら、自分の気に入っている部分を友達にしきりに伝えていた。色や形に目を向け、「この色が大好き！このしっぽがかわいい」など、熱心に友達や教師に説明をしている姿が見られた。

作品製作では、自分の描きたい物に合わせてかすれや絵の具がテカテカしている部分を描き分けている様子が見えかけた。「ちょうちんと鳥と一緒にした子を描こう」とイメージを広げ、どんどん描き進めていた。授業後には、「楽しくなるように、虹を描いたよ。わくわくした」と言っていた。絵本の魅力的な絵や言葉により、自発的に鑑賞をし、「誰かに伝えたい」「自分も描いてみたい」という思いが自然とあふれていた。

(イ) D児の場合

読み聞かせの後、「鹿みたいな生き物がおもしろい」と言い、角が生えた生き物を描き始めた。ゆっくりと自分なりのペースで背中にヒョウや黒猫を付け加えた後、「後ろは塗らない。白のままの方が、なんかいいから」と作品を仕上げた。柔らかい表情をした3匹の動物が集まった過程を、笑顔で友達に紹介していた。日頃の絵に表す活動では、自分の作品に自信がもてず製作の手が止まりがちだが、細部までこだわって仕上げた。D児は授業後の感想で「やってみて、スムーズにいった。すぐに思いうかんだのがよかった」と述べており、自分でアイデアが湧き出てきたことに喜びを感じていることが読み取れた。

(ウ) F児の場合

F児はアリが好きで、日頃から作品のモチーフにしていることがある。始めに、黒色で大きなアリを描いた。その後、『はいくないきもの』の中の気に入った色使いを参考にしてカラフルな丸を描き足していった。「アリのおうちがどんどん大きくなった。ここにご飯もあるし、どこにでも移動もできるよ」と自分の絵を指さしながら、お話をつくっていった。絵を描き進める中で想像力が膨らみ、ストーリーができていったことがうかがえた。

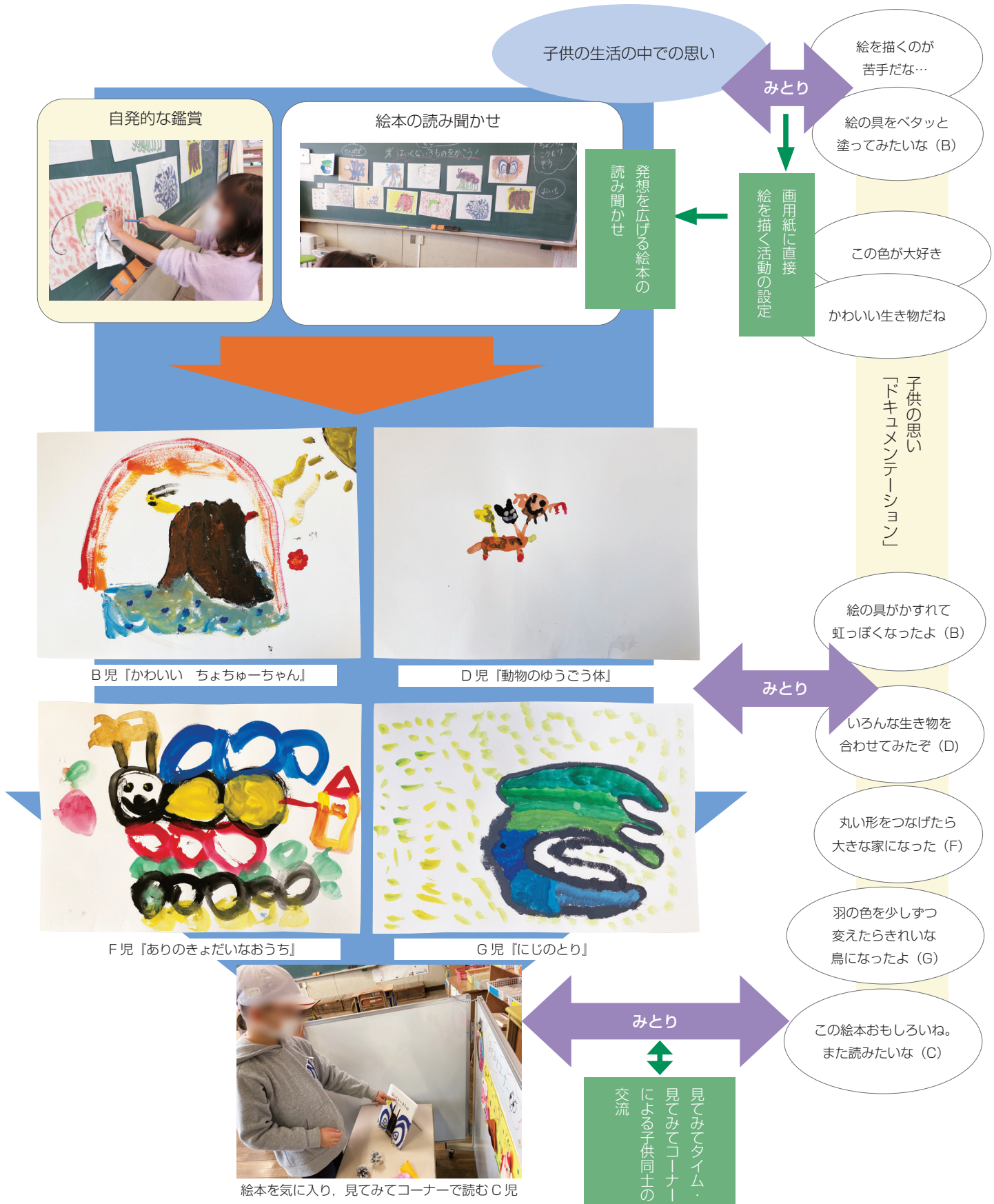


図4 「ぼくの わたしの『はくくないきもの』たんじょう！」活動の流れ

(エ) G児の場合

G児は、これまでの絵に表す活動で「ぼくは絵が下手だから苦手。何を描いたらいいかわからない」と困っていることがあり、自己肯定感の低さがうかがえた。いつも不安そうにしているG児が、読み聞かせを聞いた後に自分からどんどん描き進めていた。途中で何度も「先生、見てみて！この色、きれいでしょ。鳥にするから、きれいな羽にしたいな」と楽しそうに取り組んでいた。終盤の「見てみてタイム」で掲示した完成作品を眺めながら、「虹みたいに色が変わる羽ができて、うれしかったな」と自分の作品を誇らしく思っているようだった。

他の子供の感想からも「虫と鳥を合体させて、楽しかった」「いつもはゆっくり描くけど、今回はスラスラ描いて、おもしろかった。絵の具がヌメヌメのところ楽しかった」といった声が聞かれた。どの子も絵本の絵や言葉に刺激を受け、自分のイメージを膨らませながら製作をしていく姿が見られた。

3. 研究の成果と課題

成果として、図画工作科の時間だけでなく、日々過ごす教室環境を工夫することで、子供たちの思いをより育み、発想や構想する力を高めることにつながると手応えを感じた。「見てみてコーナー」は、初めは教師が子供たちの興味・関心がある物を飾っていたが、次第に子供たちが自発的に作品を展示していった。自他の作品を通して自分からコミュニケーションをとる姿が多く見られ、語彙の広がりにもつながった。さらに、自然に造形的な要素に触れ、会話の中でイメージが膨らんでいた。自分から積極的に作品を飾っている様子を見ると、友達との関わり合いが自己肯定感の向上に大きくつながっていったと感じた。「ひらめきコーナー」では、自由に素材に触れることで、子供たちの諸感覚が刺激され、「もっとこうしてみたい」などの発想や意欲が湧いていた。これまでの支援のタイミングを振り返ると、「やりたくない」状態を改善するために援助していたが、「やってみよう」と思えるように先行的に処遇することが大切であると強く感じた。そのために、教師が意識的にドキュメンテーションを作成し子供の興味・関心を焦点化・整理して子供と共有することは、子供たちの思いをみとり、スムーズに活動へとつなげるために有効であった。環境構成を工夫することで、子供たちが自然に関わり合い、温かい雰囲気的交流を広げていったことに

大きな成果を見出すことができた。

課題として、自立活動との関連が挙げられる。個々の自立活動の領域や指導内容を意識して活動を仕組むことで、より効果的に子供たちへ働きかけながら個の力を伸ばすことにつながると考える。そのためには、子供の思いをみとる方策を増やすことで、より幅広い視点で子供たちにアプローチできるだろう。さらに、各実践における個の発達段階に応じたきめ細やかな評価規準の設定や年間の指導計画における位置付けが今後の重要な課題である。

子供たちを取り巻く環境は日々変化している。子供たちの可能性が広がり、心身共に豊かに育ってゆくことが筆者の願いである。これからも、絵本の文化的価値を模索しながら、子供たちの思いに寄り添い、自己肯定感の向上につながるよう子供たちの主体的な造形活動を探求していきたい。

(かじかわ・あきこ)

【注】

1. 文部科学省『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 図画工作編』日本文教出版、2018、pp.110～111
2. 文部科学省『特別支援学校学習指導要領解説 各教科等編(小学部・中学部)』開隆堂出版、2018、p.206

【参考文献】

- ・文部科学省『幼児の思いをつなぐ指導計画の作成と保育の展開(令和3年2月)』チャイルド本社、2021
- ・大豆生田啓友・おおえだけいこ『「子供はかわいいだけじゃない！」をシェアする写真つき記録 日本版保育ドキュメンテーションのすすめ』小学館、2020
- ・樋口正春・仲本美央・読みあう活動研究会『これからの保育シリーズ4 絵本から広がる遊びの世界—読みあう絵本』風鳴舎、2017
- ・荒井良二『ねんどろん』講談社、2012
- ・新井洋行『つち どすん』童心社、2012
- ・皆川明・絵、谷川俊太郎・文『はいくないきもの』クレヨンハウス、2015